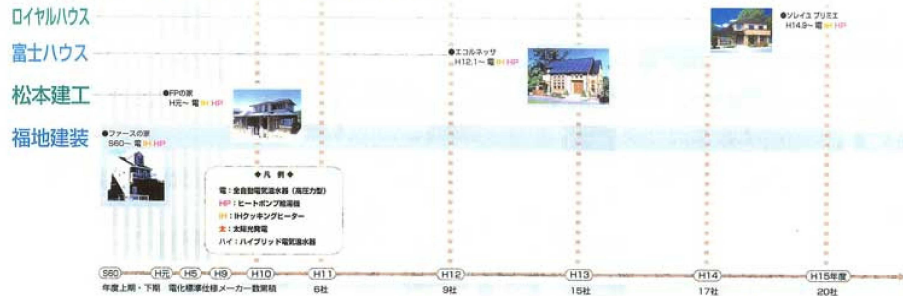


◇越えられないハードルはない◇

下表は現在のオール電化住宅が当時、電化標準仕様商品と分類されていたTEPCO（東京電力ホールディングスの略称）の年表です。

●TEPCO管内における大手ハウスメーカー電化標準仕様商品



上記記載のボランティア・チェーン『福地建装』ファース本部は北海道北斗市に本社を置き、現在全国に200社近い加盟工務店を有しています。

この表に記載されている『ロイヤルハウス』は、愛知県名古屋市に本社を置く住宅フランチャイズ・チェーンで全国に110店の加盟店を有しています。

『富士ハウス』は、静岡県浜松市に本社を置き木造住宅の注文建築業者でしたが平成21年1月、自己破産を申請して倒産しました。

『松本建工』は、北海道札幌市に本社を置く建設会社でした。独自にウレタン断熱パネル（FPパネル）の製造を手掛けましたが平成20年12月、民事再生法の適用を申請し平成21年1月、窯業系不燃外装材のトップメーカーであるニチハ株式会社へ事業譲渡して同年3月、ニチハ全額出資子会社「株式会社FPコーポレーション」を設立して現在に至ります。

ファース工法の歩み

当時、主流であった布団と同じ断熱メカニズムのグラスウール断熱材の経年変化に疑問を抱いた福地建装は昭和60年、湿度と気密を保つファース工法の原型を創出しました。長期間にわたり開発した断熱気密性能を担保できる樹脂スプレー現場発泡方式により、日本で初めて「断熱評価」を交付されました。

この施工方法で隙間からの自然換気が皆無となったファース工法は、空気が汚れにくく、誰もが安全に暮らせる電化に着目したのがオール電化構築の動機でした。当然、住宅内の温度差が少なく、エネルギーロスのない住宅となった

のですが、建材や家具などから揮発する化学物質の影響を考慮すると計画的な換気は必然的でした。

表彰制度「ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エレクトリック」

昭和55年に省エネルギー基準が設けられ、平成4年及び平成11年の改正で段階的に基準が強化されていきます。断熱・気密が高まった住宅では、シックハウス症候群やアレルギー、そしてガスストーブや石油ファンヒーターの普及で室内換気的重要性が高まり、平成15年には換気法と云われる「24時間換気システムの設置」が義務づけられました。

平成19年度には、オール電化住宅を対象に省エネ住宅のトップランナーを選定する「ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エレクトリック」が創設され、オール電化住宅の普及促進に拍車をかけました。この表彰制度では「ファースの家」が、2008-特別賞、2009-優秀賞、2010-優秀賞・優秀企業賞（3年連続受賞）を受賞しています。

予てより、エアコンの省エネ性の向上を見据え実施してきたストレス試験でしたが、外気温-15℃でも定格暖房能力を発揮できる高機能エアコンが開発され2010年8月より、エアコン暖房を「ファースの家」の主暖房と致しました。表彰制度は、2011の東日本大震災の被災地復興や電力供給の状況を踏まえ、2012から「ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エナジー」に名称を変更しそれから、「ファースの家」は表彰され続けています。

ファース工法の今後

昨今は、地球温暖化防止や省エネルギー対策の観点から家の断熱性能を高める事に潮流が変わり始めています。平成32年（2020年）にはファース工法の標準スペックである次世代省エネ基準が義務化となります。世の中の住宅断熱に関する思考がファース工法に追い付いて来た感じです。

平成32年以降は、高断熱性能に加え省エネ型の設備機器を搭載している事が必須となり、少ないエネルギーで住宅全体を快適な温度に保つ住宅のみが求められ、ファース工法は既にそのスペックを見据えて研究をしてきました。

しかしながら、基準や義務化の数値だけを意識して住む人の心情などを尊ぶ思考が希薄になってはいけません。

表題の【越えられないハードルはない】とは、弊社の朝礼で「ファースの家」開発者 ファース本部代表 福地脩悦の発した言葉である。

（ハウジング事業部 久保田公明）

幸太の知恵袋

室内干しの洗濯物を早く乾かす方法があるんだ！ それはね、くしゃくしゃにした新聞紙を洗濯物の下に敷く事で、新聞紙の表面積が増えて吸湿率がアップするんだって！ 部屋干しのコツ一度、試してみてね。